

細則様式第 1－2 号

学位請求論文の内容の要旨

領 域	健康支援科学領域	分 野	老年保健学分野
氏 名	高岡 哲子		
(論文題目) 一般病棟入院高齢患者のうつ状態を看護師が判断するための尺度開発			
主 査	和田 一丸		
副 査	丹藤 雄介		
副 査	大津 美香		
副 査	木立 るり子		
<p>I.序論</p> <p>わが国の平均在院日数は17.2日（OECD:2016）で、諸外国と比較して長い。また一般病棟入院高齢者のうつ病性障害の有病率が高い（武田:2011）と報告されている。しかし入院初期において看護師は患者の入院目的の改善を優先する場合が多いと考えられるため、心理状態の変化を見過ごす危険性がある。一般的に使用されているうつ状態尺度として、Geriatric Depression Scale short version（Shrikh & Yesavage:1965）（以下GDS15）と、Zung Self-rating Depression Scale（Zung:1965）（以下SDS）がある。これらは自記式であるため、うつに対して否定的感情をもちがちな日本人（中根ら:2010）にとって、答えることで心理的負担となる可能性が懸念される。2003～2012年までの、わが国の看護学領域における高齢者のうつに関する文献を検討した結果、うつの関連要因を含む実態を把握するための基礎的資料が蓄積されており、課題として、うつの早期発見や予防の看護介入の充実が望まれていた（高岡ら:2016）。以上から入院目的を妨げず、高齢者への負担が少なく、かつ簡便である尺度開発により入院高齢患者のうつ状態を早期に発見する方法の確立が優先課題であると考えた。「うつ状態」や「うつ」の使用や定義は一概ではない。本研究では「うつ状態」を用い、五十嵐（2013）のうつ状態の定義を参考にして「何らかの理由で気分が落ち込み、高齢者自身のもてる力で対処できず、食欲低下や不眠などの日常生活に支障をきたし、何らかの看護的介入が必要であるレベル」と定義した。</p> <p>II.目的</p> <p>本研究の目的は、一般病棟に入院している高齢患者のうつ状態を看護師が判断するための、尺度を開発することである。</p>			

（注）論文題目が外国語の場合は、和訳を付すこと。

Ⅲ. 方法

本研究は3段階で行ったため、この段階別に研究期間、研究協力者、方法を述べる。

1. 第1段階（質問項目の抽出）：研究は2014年8月に実施した。臨床経験3年以上の看護師22名に「高齢者のうつ状態を判断している基準」に関する半構成的面接を行った。これを内容分析の手法でカテゴリー化し、このうち3次コードを基に質問項目の素案を作成した。

2. 第2段階（内容妥当性の検証と尺度化）：研究期間は、2014年12月～2015年2月であった。質問項目の素案について、①精神科医と老人専門看護師による専門家の意見、②新人看護師2名と第1段階の協力者から無作為に抽出した4名によるプレテスト実施の結果、③既存のうつ状態尺度、先行研究によるうつの関連要因、うつ状態の状態像や症状との比較、照合により質問項目の適切性と尺度の簡便性を検討して「尺度原案」とした。

3. 第3段階（尺度の信頼性と妥当性の検証）：研究期間は2015年2月～12月であった。測定対象者は、一般病棟に入院してから2～7日以内で、認知症とうつ病の診断を受けていない高齢患者（65歳以上）とした。測定対象者の室を担当する看護師が、業務終了時に尺度原案を用いて測定し、構成概念妥当性をクラスター分析と探索的因子分析の斜交回転(oblimin)により確認し、尺度の原案の項目の精選と構成因子の確認を行った。基準関連妥当性を得るために、研究者が測定対象者となった高齢者にGDS15とSDSを聞き取りにより測定し、測定尺度との相関係数(Spearman)を確認した。評定者間信頼性を確認するために、翌日～5日以内に1回目とは別の室担当看護師が尺度原案を用いて測定した。1回目と2回目との相関係数(Spearman)を確認した。分析は、統計解析プログラムのR ver 3.2.3を用いた。有意水準5%で検定を行った。倫理的配慮として、本研究の協力施設および協力者と測定対象者に参加の自由、匿名性、守秘性について書面を用いて説明し、口頭と書面にて同意を得た。なお本研究は所属機関の倫理審査委員会の承認を得た(No. 2014-098)。

Ⅳ. 結果

1. 第1段階

インタビューのテキストデータを切片化し、得られた素材は3204個で、このうち「入院高齢患者のうつ状態を判断する基準」に関連した2631個を分析データとした。得られたカテゴリーは11個、3次コードは101個となった。研究者が設定した5つの除外理由に該当した質問項目を3次コードから除外して63項目が抽出された。簡便性を考慮し「はい/いいえ/不明」の3つから1つの回答を求めることとし、判定は「はい」の数が多いほどうつ状態である危険性が高いとした。

2. 第2段階

専門家の意見により除外理由の見直しを行った結果、質問48項目となった。この後、プレテストの結果を基に表現の修正を行った。プレテストにおける平均回答時間は13分であった。質問48項目を尺度原案とし、これをThe Nurse Administered Depression Scale for Elderly Inpatients (以

下NDE48)とした。

3. 第3段階

協力施設から紹介された入院高齢患者は58名で、このうち54名(93.1%)の測定結果を分析対象とした。平均年齢は 81.3 ± 7.5 歳で、女性35名(64.8%)と男性19名(35.2%)であった。

NDE48の測定結果を「はい」=1「いいえ」=-1「不明・欠」=0と得点化し、NDE48の平均得点は 7.1 ± 7.5 点であった。構成概念妥当性の確認のためクラスター分析の階層法と非階層法を実施し、似た質問項目の除外と、探索的因子分析の斜交回転を繰り返し行った結果、質問16項目3因子で因子負荷量が0.40未満と共通性が0.30未満を示す質問項目がなく累積寄与率が62.0%となったため収束とし、3因子質問16項目を採用した。これをNurse Administered Depression Scale for

Elderly Inpatients 16 (以下NDE16)とした。

3つの因子には「MR1：感情抑制困難の状態」「MR3：思考静止状態」「MR2：無力感の表出」と命名した。MR1は高齢者のうつ状態の特徴を示し、MR3とMR2が思考抑制と行動抑制を示していた。各因子間の相関係数は $r=0.09 \sim 0.27$ であった。NDE16とGDS15との相関係数は $r=0.41$ ($p=0.00191$)、SDSとは $r=0.30$ ($p=0.02633$)であった。内的整合性では、NDE 16全体のCronbach's α 係数が0.88で、因子別Cronbach's α 係数はMR1で0.91、MR3で0.85、MR2で0.70であった。評定者間信頼性は、NDE16の1回目と2回目との相関係数 $r=0.58$ ($p=0.00005$)であった。最終的なNDE16の得点は0～13点の範囲で、平均得点は 1.6 ± 2.8 点であった。

V. 考察

1. NDE16の信頼性と妥当性

尺度の精選の結果、3因子16項目で構成概念妥当性は得られたと判断する。基準関連妥当性では、NDE16はGDS15に近い尺度であること、また既存の尺度と強い相関を示さなかった理由として、GDS15とSDSが自記式でNDE16が他者式尺度であるためと考えられる。Cronbach's α 係数の全ての値が0.70以上であり、内的整合性は担保されていた。評定者間信頼性においても、相関係数から確保できたと考える。

2. 本尺度の有用性と今後の課題

本尺度は他者式であるため、入院高齢患者に心理的な負担をかけることなく測定できる。さらに、質問が16項目となり看護師にとっても負担なく簡便に使用できると判断する。今後は、NDE16を病棟で看護師が用いた測定結果から信頼性と妥当性を検討するとともに、うつ状態の判断基準を明確にする必要がある。

V. 結論

NDE16の信頼性と妥当性が確保されたことから、看護師が入院高齢患者のうつ状態を測定できる可能性が高いと判断した。

【細則様式第 1 - 2 号続き】

学位論文のもととなる研究成果としての筆頭著者原著

論文題目	わが国の看護学領域における高齢者のうつに関する研究の動向と課題 －2003～2012 年の検索結果を中心に－
著者名	高岡哲子, 木立るり子
掲載学術誌名	老年看護学
巻, 号, 項	Vo20,No2 pp68-75 DOI : 10.11477/mf.7010200555
掲載年月日	2016 年 1 月 31 日

論文題目	Development of a scale to evaluate the depressive state among elderly patients in general wards
著者名	Tetsuko Takaoka, Ruriko Kidachi
掲載学術誌名	Open Journal of Nursing
巻, 号, 項	Vol7,No4 pp495-512 DOI: 10.4236/ojn.2017.74039
掲載年月日	2017 年 4 月 30 日